

ゴードン会議(Gordon Research Conference)に参加して

2018 年 8 月 12 日から 17 日にかけて開催されたゴードン会議(Gordon Research Conference)に、物性物理化学研究室から野本が参加させて頂きました。このゴードン会議は科学の世界では大変有名な、歴史と権威のある国際学会として知られています。会議は幾つかの細目に分かれており、分子性導体を取り扱う“Conductivity & Magnetism in Molecular Materials”というテーマは今回で 3 回目の開催となりました。場所はアメリカ東部、ロードアイランド州にあるブライアント大学で行われました。場所の関係上アメリカの研究者が参加者として多く名を連ねていましたが、日本からも元物性物理化学研究室の今城さん(現東大物性研)を含め、多くの研究者が参加しました。ゴードン会議は通常の学会とは少々趣が異なり、発表者は publish 前の最新の研究結果を持ち寄ることが求められ、その代わりに会議中に報告された内容について外部に口外することが固く禁じられるというユニークな特徴を持っています。

全 5 日間の開催期間は、口頭発表とポスター発表、インフォーラムミーティングなどから成り立っています。口頭発表での研究テーマは磁気相転移、スピン液体、スピントロニクスなどの磁性関連から、様々な物質・環境で発現する超伝導、ディラック・ワイル電子系など、大変バラエティー豊かでした。私は今回、“Heat Transport Property of Charge Order System in Organic Conductors”というタイトルのポスター発表での登録で、電子ガラス系における特殊なフォノンモデルについて議論を交わしました。有機導体の熱伝導率測定はあまりポピュラーな研究手法ではないということもあって、その測定方法などに多く質問が寄せられました。また、フォノンモデルに関してはディラック系やスピン液体物質などへの拡張性などかなり深い議論にまで及び、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。研究以外にも、アメリカらしいボリュームのある昼食や、夜に振る舞われるビールやワインなど、非常に楽しめる会議であったように思います。最終日にはロブスターが丸々一匹、「ロブスターはボストン(マサチューセッツ)の名物だから出ないだろう」という大方の予想に反して出現し、食事の場を賑わせました。

実は今回の会議、個人的には波乱の連続で、関西空港での飛行機の遅延に始まり、飛行機の欠航、ルート変更、キャンセル待ち交渉、挙句にロストバゲッジという散々な始まりでした。会議後の後泊でも火災報知機の誤作動で夜中に叩き起こされるなど、最初から最後まで不幸の連続ではありましたが、会議そのものは興味深い研究内容と活発な議論の溢れる非常に充実したものであったと思います。次回開催はアジアでの開催も企画されているとのことで、また趣の異なる面白い会議になるのではないかと期待しています。

(野本哲也)

